

●維新精神史研究

徳重浅吉著

この書は大谷大學教授徳重浅吉氏が大學卒業以來最近十年間に諸雜誌の上に發表せられたことのある明治維新史關係の論文二十編を補訂し、その内容の相關聯するところに従つて編次せられしもの、まづ日本國道學の成立に於て維新史の意義を日本我的發見、自覺にあるとする著者の總論的立場を定め(第二章)ついで幕末政治の特殊形態と武士階級の窮乏の事實を稽へ(第三章、四章)、その基礎の上に王政復古の思想的背景を概観し(第七章)、轉じて諸の志士の立場と精神とを明かにし(第九—十二章)、然る後維新改革の指導精神を吟味し、神佛分離の問題よりひいて廣く、維新草創期に於ける教學の問題に及び(第十三—十八章)、最後に明治文化の特質、日本精神の意義、本領・指針の二章を以て全體の結論に擬してゐる。

今通讀に際して心付いた二三の點を擧げて著者の史風の一斑を窺ふならば、第一に著者が精神史の對象となるものを單に時代の思想信仰等に限らずして廣く一般歴史事象の上にまで及ぼし、その複雑なる推移の中に時代精神の動向を把握しようとするものが擧げられる。換言すれば著者の以て精神史となす所のものはその内容に於て何等かの特殊のものを有するのではなくしてむしろより多く一般史に近いものを有つてゐることであるそれは若干の體系づけられた思想を選んでそれら相互の關聯發展の跡を跡づけようとするものでもなく、さればとてまた社會の構造としてその思想の性格との間に一つの必然的な相關關

係を見出して、それを或る一般的な形にまで形式化しようとするものでもない。この後の點に就いて更に言ふならば著者の關心は社會的なものよりもより多く個人的なものに向けられてゐるやうに思はれる。然もその個人は必ずしも維新史上の大きいなる名前にはのみ限るのではなくしてあらゆる人々に平等に向けられてゐるのである。勿論著者の志士に對する大いなる敬愛の情は行文の間に自ら汲みとられるものがあるが著者はそれを決して偶像的な英雄崇拜にまで陥らしめしことなく、あくまで彼等の本領とその精神とを正しく領得することを期してゐる。而してそれが爲には著者は決して流布の資料にとゞまらず、自ら困苦して諸種の資料を蒐集し、あらゆる零細なるもの、上にもなほその意味を認めて自己の所論に寄與せしめてゐるのである。就中明治初年の教學關係の諸編は殊に著者蒐集の新資料に俟つところ多く、讀者はそれによつて新に教へられるところが多いこの書が決して時を見はからつての著でない所以もまたそこにあるわけである。筆者はこの機に於て片々たる時流に動かされることなく、終始塗らざる誠實さを以て學んで倦まないところの著者に深甚の敬意を表したいと思ふ。(菊列七九六頁、立命館出版部發行、定價六・〇〇)(柴田)

●新聞叢書

明治文化研究會編輯

近時國史に對する反省が所謂専門家のみならず、一般に深まりつ、ある状態に應じて、研究論議の發表以外に史料原典の出版が續々行はれつ、あるのは誠に望まじき事である。最近明治